

明治18年大阪水害の被害と記録写真

—1885 (明治18) 年淀川大洪水の研究 その1—

植 村 善 博

〔抄 録〕

Damage and photograph of 1885 Osaka flood disaster

—Study on 1885 River Yodo big flooding (Part 1)—

1885 River Yodo big flooding was caused one of the severest damage of Osaka by natural disaster. This paper is aimed at discussing damage and photograph of 1885 flood disaster.

The results obtained are as the followings

- 1) This flooding happened at June (The first flood) and July (The second flood) twice in 1885 (Meiji 18). By bank collapse of left side at Ikaga-mura, torrent water flowed into and flooded all around eastern Osaka lowland in June. In early July, same point of the former was broken again and level of inundation was 0.5 m higher than the first flood, and coastal lowland of western Osaka city was completely inundated by flooding of storm surge accompanied with typhoon.
- 2) The damage resulted in 81 fatalities, 1,749 houses destroyed, 72,509 houses inundated in Osaka Prefecture. Mandagun and Higasinarigun were the severest damaged by torrent water, and Nisiku, Kitaku and Nisinariku were the most serious damaged by storm surge.
- 3) Four kinds of photograph collections were examined for making data base and considering these meanings. As a result, thirty eight photographs were identified except same photos, and were classified by the titled card and its place.

Keyword : 1885 Osaka flood disaster, damage, storm surge, photograph of flooding

1. はじめに

1885（明治18）年6月中旬および7月上旬に発生した淀川大洪水は史上最大規模のものであった。このため、大阪府北部と大阪市の広い範囲に深刻な被害を発生させている。本水害は、1) 1889年の磐梯山大噴火、1891年の濃尾大地震とともに3種類の最大規模の自然災害の一つであること、2) 明治前期の近代国家形成期に発生し、明治政府や地方自治体が組織的な調査や対応、復旧などを実施した初期の事例であること、3) 写真類によって被害状況が記録された最初期の事例であり、瓦版や石板画などが共存するメディアの転換期にあたっていること、4) 河川法制定や国営河川改修事業を要求する住民運動を促進する契機となったこと、などの理由により重要な意義を持つ災害と考える。

本水害について大阪府（1887）『洪水志』は詳細な公的記録であり、武岡（1931）や左岸水害予防組合（1929、1934）、淀川百年史編集委員会（1974）、服部（1995）などに記述がある。

また、大阪府下被災町村の地方史料にも多数の記録が残されている。金子（2005）は明治前期の写真について、北原（2006・2012）は災害写真やメディアの対応について考察している。筆者は自然地理学の立場から、本水害の全体像を復元し、被害の特徴や発生要因、地域社会への影響を明らかにすることを目的に研究をおこなっている。本稿では被害の概要および水害写真をデータ化し撮影目的や対象物について考察した結果を報告する。

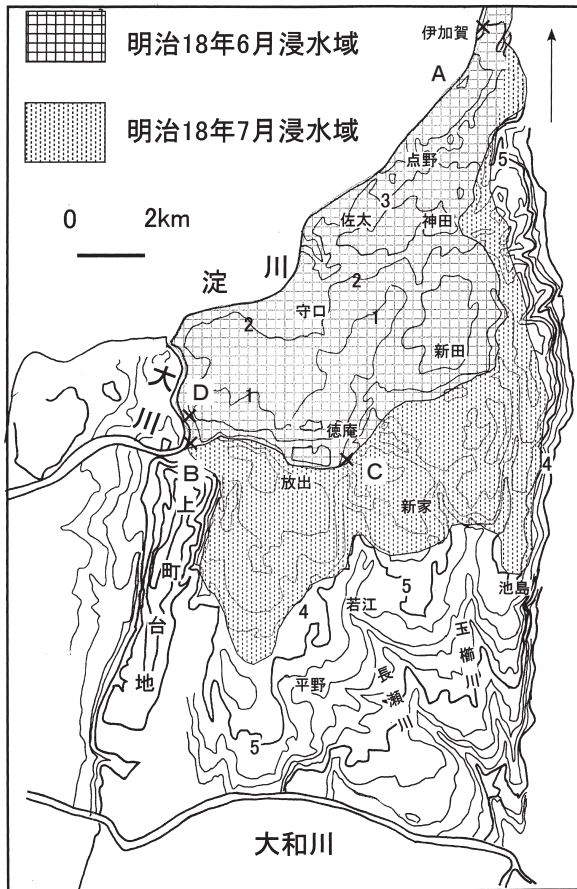


図1 明治18年淀川大洪水による東大阪地域の浸水範囲
×は堤防決壊地点、等高線は1m間隔の地盤高
浸水域は大阪府下洪水淀川沿岸被害細図による

2. 明治18年大阪水害と被害

1) 水害の時間的経過

本水害の概要を大阪府編『洪水志』の記述などにより要約しておこう。

明治18年6月上旬から雨が降り続き、とくに15日から17日にかけて豪雨となった。16日には桧尾、芥、安威、茨木の各河川が氾濫、淀川は増水して17日

昼には枚方の水位が10尺を超えた。同日20時30分に岡新町の天野川堤が決壊、22時30分頃に伊加賀の山川排水口より淀川が逆流、堤内および堤外の流水によって淀川堤防は決壊した(図1のA)。23時には切れ口が20間余に拡大、激流は住家20数戸と人畜を流出させ、下流の茨田、讃良両郡内に流れ下った。淀川水位は18日3～4時に最高の1丈1尺に達し、その後は次第に減じた。19日には伊加賀の切れ口が50～60間に拡大、浸水域は茨田、讃良両郡と東成郡北部一帯に拡大し水深は2～5尺に達した。寝屋川の横堤防は破堤寸前になったが、懸命の水防作業の結果もちこたえた。このため、若江、河内など南部諸地域への流入は阻止された。しかし、20日に恩地川が氾濫している。これを第1水害とよぶ。茨田、讃良、東成各郡の長期にわたる浸水は被害を深刻化させることが危惧された。このため、建野郷三知事らは大川と寝屋川との合流点に位置する野田村における「わざと切り」を決定した。すなわち、同村に出張所を置き網島大長寺裏の大川左岸堤防を切開、内水を大川へ排水する作業を実施した。堤切りの作業は20日から約1100人の役夫を集めて開始され、最初に幅5間の溝を掘った。ついで、21日には約10間、23日9時30分に幅は26間に拡大した(図1のB)。伊加賀では淀川堤防決壊部の堰止め工事を実施している。船により運び込んだ工事資材を使い、土豚と粗朶工により沈床を延長させ仮堤防を完成させる作業であった。25日には工兵隊が飛橋工事を開始、囚人100余人を使役して土豚造りに従事させた。同日13時30分建野知事らが船で枚方に到着、26日19時に切れ所の飛橋が完成した。27日には東部から約30間、西部から約28間の柴工を延長させたが、約20間分が未完成であった。28日13時に松方正義大蔵卿が枚方に到着して工事現場を視察した。

いったん衰えた雨足は再び6月27日21時から雷雨となり、28日には台風に伴う連続的大雨となった。同29日には風が強まり、7月1日に暴風雨となった。淀川の水位は再び上昇、30日に枚方で約12尺に達し、修理中の伊加賀の仮堤防が約60間にわたり決壊した。このため、濁流が再び堤内地へ流入、同日夕刻には寝屋川堤防を越流、徳庵の堤防が破壊された(図1のC)。ここから南方へ流れ下った水は2日から3日午後に寝屋川以南の若江、河内、渋川各郡の広い範囲に氾濫し、淀川と大和川間の東大阪一帯が大湖水になったという。7月1日に野田村の切り口付近の水勢が強く危険状態になったため、出張所を移転させた。同日夕刻には土佐堀川や堂島川の水位が上昇して堤防を溢流、市街地に流入して平均水深2尺程度まで浸水した。2日朝に造幣局付近で越流し市街地の浸水が拡大、梅田では水深4尺に達した。桜宮では大川堤防が3カ所で決壊した(図1のD)。大川に架る川崎橋や天満橋、天神橋、難波橋(南半分)、淀屋橋、安治川橋(滞流が著しいため軍により爆破)などの橋が流出、破損して通行が不能になってしまった。このため、7日には軍が難波橋南半部に舟橋を設置している。これらを第2水害とよぶ。

大阪東部における2回の浸水域の特徴をみると、第1水害の浸水高度は約3.5m前後で寝屋川堤防下まで浸水した。第2水害の浸水高度は約4mで第1水害のそれより約0.5m高い。このため、寝屋川堤防が破壊され浸水が南部へ拡大、東は恩智川堤防付近、南は池島、瓜生堂、

小若江、蛇草、正覚寺など旧大和川流路に挟まれた後背湿地まで水没した（図1）。大阪城が位置する上町台地とこれに続く砂州・砂堆を除いて大阪市街地はほぼ全域水没した。浸水域は高木（1985）の地形分類図と比較すると、第1水害では淀川左岸の氾濫原およびかつての深野池や新開池とその周辺のラグーン性低地が完全に水没した。一方、第2水害ではさらに南方のラグーン性低地と旧大和川の三角州性低地が水没、天井川に挟まれた氾濫原の一部も水没している。このように、2回の浸水域と低地の微地形との間に密接な関係が認められる。

2）被害の地域的特徴

本水害は6月中旬の第1水害と7月上旬の第2水害とに分けられる。しかし、被害統計ではこれらを区別できないため一括して扱う。大阪府下の郡区ごとの被害状況を表1に示す。本水害による死者不明者は81名、流出戸数1,749戸、浸水戸数は約72,509戸、被災人口は約30.4万人に達した。さらに、救民員数約7.8万人、橋流出512カ所、堤防決壊224カ所、総損亡代償は338万7097円に達したとされる。

死者は茨田郡の49名と東成郡の13名で合わせて52名と全体の77%を占める。流失戸数も前者で739戸、後者で836戸、両者を合わせて90%と圧倒的に多い。すなわち、茨田・東成両郡は伊加賀の堤防切れに伴う流水による直撃を受けて被害深刻で、最激甚被災地となった。浸水戸数では西区の23,116戸（浸水率86%）と西成郡の14,253戸（同46%）が多く、両者を合わせて全体の52%に達する。また、北区8,691戸（同50%）、茨田郡6,996戸（同97%）、南区5,236戸（同

表1 明治18年水害の郡区別被害 大阪府下洪水淀川沿岸被害細図（朝日新聞）による
人口・戸数は「明治十八年一月一日調日本全国民籍戸口表」による

郡 名	死者・不明者	負傷者	流出戸数	流出率 %	浸水戸数	浸水率 %	浸水被災人口	救民員数	救民員率 %	堤防決壊数
茨田郡	49	5	739	10	6,996	97	33,619	20,863	60	58
讃良郡	2	0	10	0.2	1,338	39	6,160	6,064	39	40
交野郡	0	0	7	0.1	653	12	3,095	0	0	33
若江郡	2	5	61	0.9	3,635	54	17,810	8,949	28	170
渋川郡	0	0	3	0.09	838	28	6,369	1,662	11	0
河内郡	0	0	7	0.1	804	21	5,456	1,865	10	24
住吉郡	0	0	0	0	211	3	1,037	1,037	4	0
嶋上郡	0	0	3	0	421	8	1,421	968	4	3
嶋下郡	0	0	0	0	156	2	463	107	0	0
西成郡	1	2	58	0.1	14,253	46	61,723	2,505	2	41
東成郡	13	5	836	6	4,421	34	27,905	27,905	53	6
北 区	1	0	18	0.1	8,691	50	33,908	2,491	4	0
東 区	1	0	0	0	1,738	8	6,380	0	0	0
南 区	5	0	0	0	5,236	19	15,286	2,290	3	0
西 区	7	3	0	0.02	23,116	86	83,567	1,000	1	2
総 計	81人	20人	1,749戸	1.2%	72,509戸	39%	304,199人	77,706人	11%	224カ所

46%)、東成郡4,421戸 (同34%)、若江郡の3,635戸 (同54%)と続く (図2)。一方、被災総人口約30.4万人のうち西区の8.3万人と西成郡の6.2万人が多く、ついで北区および茨田郡とも3.4万人、東成郡の2.8万人の順になる。西区、北区および西成郡を合わせると59%に達する。このように浸水被害が西区や北区、西成郡で深刻であった理由は、第2水害で大阪湾に発生した高潮氾濫により臨海低地が被災、淀川の洪水流と複合して大阪西部低地の人口稠密地域が深刻な浸水被災地になったことを意味する (図3)。救民員数では東成郡の2.8万人、茨田郡の約2.1万人が突出しており、合わせて63%を占める。両郡は家屋や財産の流出と浸水による被害激甚地区であり、近郊農村地域に多くの貧困者が居留していた当時の社会構造を反映したものと考えられる。

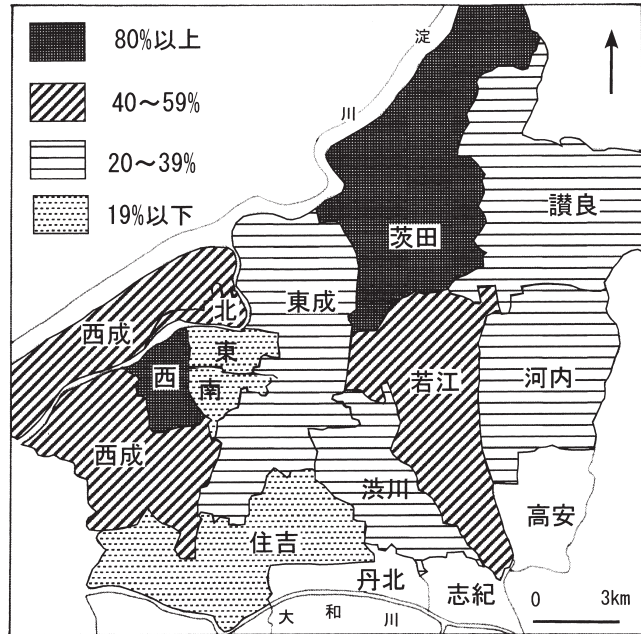


図2 郡区別浸水率の分布



図3 此花区春日出2丁目共同墓地の「重修桜堤碑」
高潮発生による被災と青海安五郎による防潮堤修築の功績を記録する、篆額は三条實美

3. 明治18年水害写真

明治18年水害を撮影した写真は相当数存在すると推定される。今

回、写真帳に仕立てたもの2冊、淀川資料館所蔵の資料および『淀川左岸水害予防組合誌』に掲載された写真類について調査した。これらは災害写真として最初期のものであり、まとまった形で保存されている点で貴重である。つぎに4種類の写真資料を検討する。

1) 大阪歴史博物館蔵 『明治拾八年大阪府水害之実写』20枚 写真帳仕立て。以下では大歴本 (R) とよぶ。これはヨコ17cm×タテ12cmで右開き、薄緑色の布製表紙をもつ写真帳である (図4上)。内容はヨコ13.5cm×タテ10cmの写真を表裏両面に1枚ずつ20点を貼り付けてお

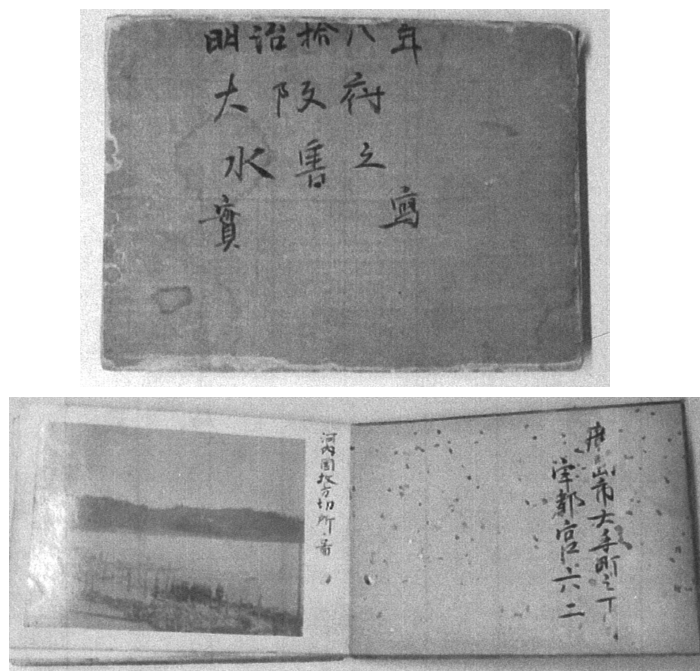


図4 『明治拾八年大阪府水害之実写』の表紙（上）、裏表紙と写真貼付状況（下）、大阪歴史博物館蔵

り、昭和39年に村松始芸留氏から寄贈されたものとされる。全体に写真の保存状態は良好なものが多い。表紙裏に「広島市大手町三丁目 宇都宮六二」の墨書がある（図4下右側）。写真の撮影年月日、タイトルおよびその表記法を表2に示す。表記法はタイトルなどを記す題紙の種類によりAとBに分ける（図5のA, B）。さらに、題紙が写真内に置かれているIと外側に貼り付けられたO、その位置が右側をR、左側をLとして区別する。題紙を欠くものをC（図4下左側）とする。撮

影年月日について7月2日3点、同3日1点、同10日3点、上旬7点で、6月撮影のものはな

表2 『明治拾八年大阪府水害之実写』大歴本 写真データ

No.	撮影年月日	タイトル	表記法	府中本	淀川
R 1		河内国枚方切所ノ図	COR		
R 2		枚方伊賀加邨ノ図	COR	N18	
R 3	明治拾八年七月貳日	大阪城東ヨリ河内一円洪水之図	BOR	N18	
R 4	明治十八年七月上旬	大阪府下東成郡森ノ宮近傍水害	AIR	N16	○
R 5		網島大長寺裏切り口ヨリ大長ヲ望ムノ図	COR	N19	○
R 6		大長寺裏南ヨリ桜ノ宮ヲ望ムノ図	COR	N13	
R 7	明治十八年七月十日	大阪府下東成郡野田村民家浸水ノ図	BOR	N 4	
R 8	明治十八年七月十日	桜之宮切レ所ノ図 斤町裏ヲ遠景ニ見ル	BOR	N15	
R 9	明治十八年七月上旬	大阪天満橋水害	AIR	N 3	○
R10	明治十八年七月上旬	大阪天満橋及京橋水害	AIR	N 6	○
R11	明治十八年七月上旬	大阪天満橋及水害	AIR		
R12	明治拾八年七月二日	葭屋橋及天神橋破橋工兵尽力之図	BOR	N14	○
R13	明治十八年七月十日	難波橋流出ノ後仮船橋ノ図	BOR		
R14	明治十八年七月上旬	大阪公園地及浪花橋水害	AIR		
R15	明治十八年七月上旬	大阪中之嶋公園地水害	AIR	N12	
R16	明治拾八年七月二日	堂島米市場浸水ノ図 市内船ニテ往来ノ景況	BOR	N10	○
R17	明治十八年七月上旬	大阪端建蔵橋及寄留地水害	AIR		
R18		大阪府庁	AIR		
R19	明治十八年七月三日	大阪川口安治川橋ニ諸橋流滞図 北安治川ノ裏手諸村落洪水遠景	BOR	N 7	○
R20		安治川橋流失ノ図	COR		

い。年月日を欠くものが6点あり、うち5点(18以外)は手書きである。撮影対象は枚方2点、網島・桜宮3点、橋の流出9点、浸水状況6点からなり、大川に架かる橋の被災状況を示すものが最も多い。表記法ではAIRが8点、BORが7点、Cが5点である。

2) 大阪府立中之島図書館蔵 『明治18年大阪府水害写真帳』 20枚の写真帳仕立て。以下では府中本(N)とよぶ。これは昭和55年に寄贈されたもので、ヨコ21cm×タテ14cmで左開き、白ケント紙の表紙に表題をペン書きしている。台紙20枚に1点ずつヨコ14cm×タテ10cmの写真を貼り付け、簡易製本により写真帳に仕立てたもの。製本は近年におこなっており、本来の形態については不明である。表3に撮影年月日、タイトルおよび表記法を大歴本と同じ方法により示す。全てに撮影年月日の記入があり6月下旬3点、7

月2日5点、7月3日2点、7月10日4点、7月上旬4点、7月中旬2点である。これは大歴本より長い期間のものを含む。撮影対象は枚方3点、網島・桜宮5点、橋流失5点、浸水状況7点からなる。図6に撮影地点と方向を示す。大歴本に比べ網島・桜宮が多く、橋流失は少ない。題紙の表記法はAIRが4点、BORが16点である。なお、大歴本と府中本には同一写真が9点存在し、タイトルはすべて同じであった。

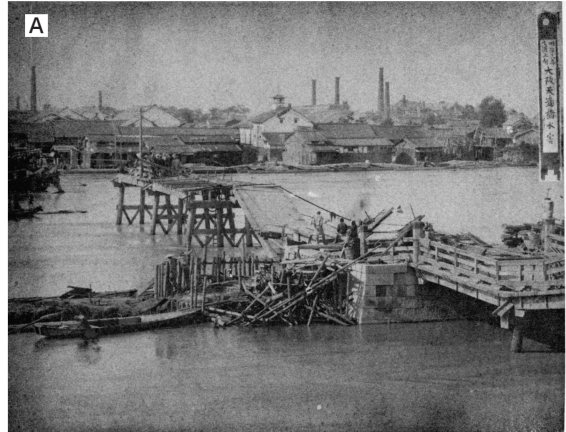


図5 『明治拾八年大阪府水害之実写』の題紙
Aタイプ AIR(上)とBタイプ BOR(下)
大阪歴史博物館蔵

表 3 『明治18年大阪府水害写真帳』府中本 写真データ

No.	撮影年月日	タイトル	表記法	大歴本
N 1	明治十八年七月十日	大長寺裏手咄キ水ノ図 但シワザト切（破損あり）	BOR	
N 2	明治十八年七月十日	川崎ヨリ網島ノ切り口ヲ見ノ図 遠景ハ河内一円ノ洪水	BOR	
N 3	明治十八年七月上旬	大阪天満橋水害	AIR	R 9
N 4	明治十八年七月十日	大阪府下東成郡野田村民家浸水ノ図	BOR	R 7
N 5	明治十八年七月二日	大阪淀屋橋落橋之図 裁判所浸水ノ景況	BOR	
N 6	明治十八年七月上旬	大阪天満橋及京橋水害	AIR	R 10
N 7	明治十八年七月三日	大阪川口安治川橋ニ諸橋流滞ノ図 北安治川ノ裏手諸村落洪水遠景	BOR	R 19
N 8	明治十八年七月中旬	河内国枚方切レ口下手之図	BOR	
N 9	明治十八年七月中旬	河内国枚方切レ口上手之図	BOR	
N 10	明治十八年七月二日	堂島米市場浸水ノ図 市内船ニテ往来ノ景況（破損あり）	BOR	R 16
N 11	明治十八年七月三日	大阪府庁洪水非常渡船図	BOR	
N 12	明治十八年七月上旬	大阪中之島公園地水害	AIR	R 15
N 13	明治十八年六月下旬	大阪網島切り口咄キ水ノ図	BOR	R 6
N 14	明治十八年七月二日	葭原橋及天神橋破橋工兵尽力之図	BOR	R 12
N 15	明治十八年七月十日	桜之宮切レ所ノ図 斤町裏ヨリ遠景ヲ見ル（破損あり）	BOR	R 8
N 16	明治十八年七月上旬	大阪府下東成郡森ノ宮近傍水害	AIR	R 4
N 17	明治十八年七月二日	大阪城東ヨリ河内一円洪水之図	BOR	R 3
N 18	明治十八年六月下旬	河内国枚方堤防切レ口ノ図（破損あり）	BOR	R 2
N 19	明治十八年六月下旬	網島大長寺野田裏洪水遠景	BOR	R 5
N 20	明治十八年七月二日	大阪城東ヨリ河内東南ノ洪水ヲ見ル図	BOR	

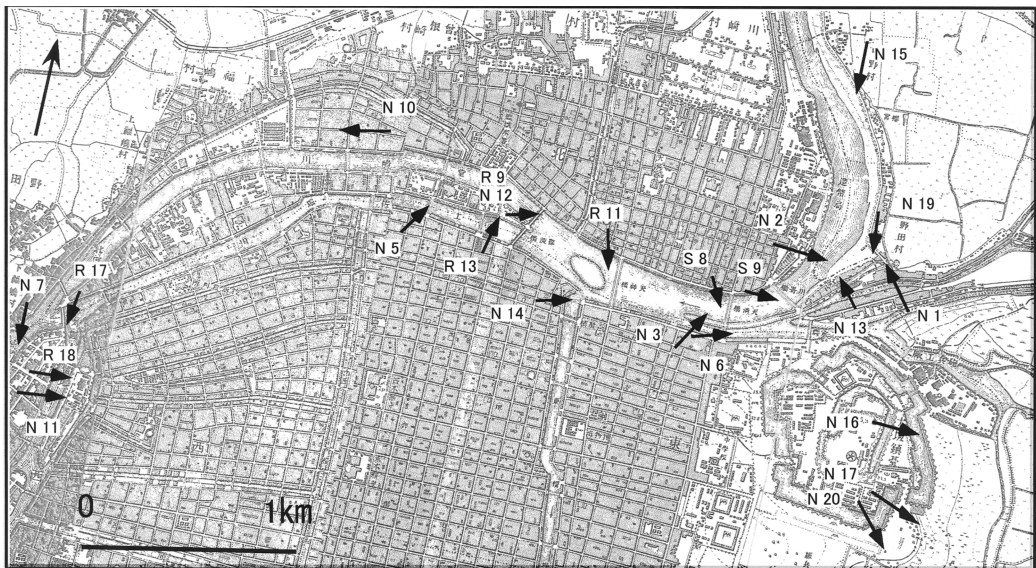


図 6 大川沿岸における被害写真の撮影地点と方向

3) 淀川資料館蔵 明治18年の水害写真は①明治18年(1885)左岸枚方決潰大正 5 年 (1917) 右岸大塚決潰写真帳 (J-2-8) および②明治18年枚方伊加賀決潰大正 6 年高槻大塚決潰各地災害状況 (J-2-12) に含まれる。両者とも明治18年と大正 6 年の水害写真を集めたもので、明治18年写真は 9 点ある。そのうち 8 点は大歴本および府中本に同一のものがあ、両者にない 1

表4 淀川資料館所蔵 写真データ

No.	撮影年月日	タイトル	表記法
Y 1	明治十八年七月上旬	大阪東成郡網島 大長寺裏切口 (わざとぎれ)	AIL

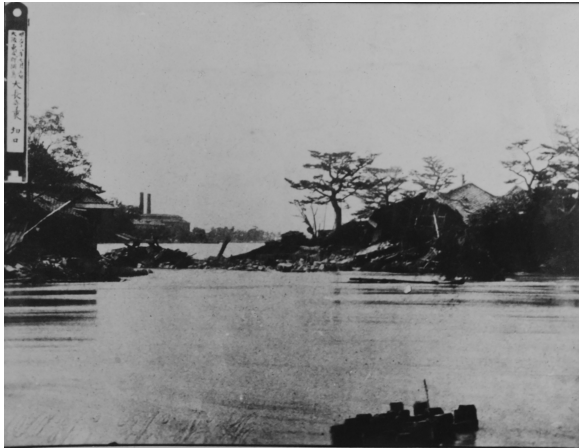


図7 「明治十八年七月上旬洪水大阪東成郡網島大長寺裏切口」AIL タイプ
淀川資料館蔵

点のタイトルは J-2-12によれば「明治十八年七月上旬洪水大阪東成郡網島大長寺裏切口 (わざとぎれ)」と記す。題紙はAILタイプである(図7)。

4) 『淀川左岸水害予防組合誌』

本書は全3編5巻からなる大冊で、明治18年写真は昭和4年発行の中編に10点、昭和6年発行の後編に1点の計11点が掲載されている。以下では左岸本(S)とよぶ。いずれもアート紙に印刷された鮮明な写真である。

収録編とタイトルを表5に示す。中編の10点は題紙や撮影年月日を欠く。野田村網島と桜宮、造幣局から対岸を望む7点は大川左岸の破堤や被害状況を示す。残り3点は川崎、天満、難波の各橋の破壊状況を示し、難波橋では船橋の状況を写す。10点全てが大川における被害を示す。後編の1点は「伊加賀堤防決潰の光景」のタイトルをもち、題紙はAIRタイプで、「明治十八年六月下旬河内枚方伊加賀村堤防第一水害基則雨中□写ス」と記す。

以上、4資料について調査した結果、大歴本20点、府中本20点、淀川資料館9点、左岸本11

表5 『淀川左岸水害予防組合誌』左岸本 写真データ

No.	収録	タイトル
S 1	中編	明治十八年洪水野田切所態ト切
S 2	中編	明治十八年洪水桜宮堤防決潰(其一)御神酒地藏北手ノ切所
S 3	中編	明治十八年洪水桜宮堤防決潰(其二)桜宮本殿北手宮裏ノ切所
S 4	中編	明治十八年洪水造幣局内ヨリ桜宮ヲ望ム(其一)向テ右端ハ桜宮南ノ鳥居
S 5	中編	明治十八年洪水造幣局内ヨリ桜宮ヲ望ム(其二)中央茅葺ハ田能村直人邸
S 6	中編	造幣局内ヨリ桜宮ヲ望ム(其三)
S 7	中編	明治十八年洪水川崎橋破壊
S 8	中編	明治十八年洪水天満橋破壊
S 9	中編	明治十八年洪水難波橋流失跡ノ船橋
S 10	中編	明治十八年洪水桜宮救助小屋再壊
S 11	後編	明治十八年洪水枚方伊加賀堤防決壊の光景 (表記法: AIR), 題紙: 明治十八年六月下旬 河内枚方伊加賀村堤防第一水害ノ基則雨中写ス

点、計60点の写真を確認した。このうち重複するものを除くと38点となる。これらの写真はその特徴から乾板により撮影され、鶏卵紙に焼き付けられたものが大半を占めると推定される（金子2005）。大歴本および府中本の写真帳は多様な写真の寄せ集めであり、当初から写真帳として制作されたものではない。一方、左岸本中編に掲載の10点は他の3資料と共通するものではなく、『洪水志』所収の水害石版画15点中10点と全く同一情景を示す。すなわち、石版画はかなりの技術を有する画家の手になると推定されるが、それらの原図が中編10点の写真であったと考えられる。残り5点の石版画は枚方伊加賀の堤防修築状況を描いたもので、これらの写真は発見されていない。また、後編の1点（AIRタイプ）は大歴本のR2および府中本のN18と同一写真である。しかし、R2の表記法はC、N18はBORであって題紙タイプがすべて異なる。これらが何を意味するのか現時点では不明である。また、出水写真として南区安堂寺町の鴻野多平が被害写真を撮影、売り出したとの朝日新聞の記事（明治18年7月10日）があり、それがどれにあたるのか、他にも撮影者や販売者がいたのかなどについて疑問が残る。

4. まとめ

1) 史上最大規模の被害を発生させた明治18年大阪水害は、6月中旬の第1水害と7月上旬の第2水害に分けられる。東大阪での浸水高度は第1で約3.5m、第2で約4.0mと後者が約0.5m高い。野田村におけるわざと切りは第1水害、東大阪南部や大阪市街地の浸水と大川に架かる多くの橋の流失は第2水害による。

2) 2回の水害による死者不明者は81名、流出戸数1,749戸（流出率1.2%）、浸水戸数は72,509戸（浸水率39%）、被災人口は約30.4万人、橋流出512カ所、堤防決壊224カ所に達した。茨田、東成両郡は淀川からの流入水による激甚な被災地となり、西区、北区、西成郡の深刻な浸水被害は台風に伴う高潮氾濫によるところが大きい。

3) 本水害の記録写真を4資料について調査した結果、大歴本20点、府中本20点、淀川資料館9点、左岸本11点、計60点の写真が確認できた。そのうち、重複するものを除外すると38点となる。大歴本と府中本は多種の写真からなり当初から写真帳として制作されたものではない。

4) 写真の題紙にはA,B,Cの3タイプがあり、その位置により写真内のIと外のO、および右おきRと左おきLとがあり、表記法として分類した。以上により写真のデータ化をおこない、表1～表5に示した。今後は、これら多様な被害写真の意味とその背景を明らかにすることが課題である。

謝辞

淀川水害について議論して下さった福田正宣・木谷幹一・片山正彦の各氏、写真資料の提供と引用許可を与えられた大阪歴史博物館、国交省淀川河川事務所と同淀川資料館に感謝します。

参考文献

- 服部 敬 (1995) 『近代地方政治と水利土木』、思文閣出版、385p、
金子隆一 (2005) 1880年代における日本の写真状況と磐梯山噴火写真、中央防災会議災害教訓の継承に関する専門調査会報告書「1888磐梯山噴火」、141～150
北原糸子 (2006) メディアとしての災害写真—明治中期の災害を中心に、『版画と写真—19世紀後半出来事とイメージの創出—』、73～95、神奈川大学
北原糸子 (2012) 『メディア環境の近代化 災害写真を中心に』、お茶の水書房、116p
大 阪 府 (1887) 『洪水志』大阪府蔵版、90+24p
高木勇夫 (1985) 地盤沈降地域の条里—河内平野の場合—、『条里地域の自然環境』、104～123、古今書院
武岡充忠 (1931) 『淀川治水誌』、292p
淀川百年史編集委員会編 (1974) 『淀川百年史』、近畿地方建設局
淀川左岸水害予防組合編 (1929, 1931) 『淀川左岸水害予防組合誌』中編, 後編
淀川左岸水害予防組合編 (1934) 『明治十八年淀川の大洪水』、26p

(う え む ら よ し ひ ろ 歴史文化学科)

2015年10月30日受理